

座談会

同志社戦後六十年の
足跡をたどる

出席者 樋口 秀雄 (大学名誉教授)

星野 紅 (元女子中学校・高等学校教頭)

井ヶ田良治 (大学名誉教授)

望田 幸男 (文学部教授)

本宮 啓 (元中学校教諭)

小倉 襄二 (大学名誉教授)

坂本 清音 (女子大学特任教授)

司会 編集部 (敬称略・ABC順)

戦中・戦後の同志社

司会 本年は同志社の創立百二十五周年となりませんが、この長い同志社の歴史のなかで、今回は特に戦中・戦後六十年を中心にお話をしていただききたいと思います。

まず、話に入る前に、戦後の教育制度の発足についてかいつまんで眺めてみたいと思います。戦後教育の出発点となっ

たのが、教育刷新委員会です。戦後、アメリカ教育使節団が来たとき、これに対応する日本側の委員会として発足しまして、実に百四十二回会議を開き、うち三十五の提案を行い、六・三・三・四制をはじめ教育法の制定に貢献しております。大学はどういう風に変ったのかと言いますと、旧制高校と予科を取り込んで発足。アメリカの大学制度、とくにリベラルアーツの考え方を採用する方向で

進んできました。さらに高校との関連づけについて申しますと、一九四六年二月の文章で、高卒者は全員大学に入学する資格を持つことになりました。ヨーロッパのように大学資格試験合格者が大学に進むのではなく、高校卒業者は大学が許可すれば誰でも入れるようになり、スムーズに流れるシステムになりました。小倉 確かに今おっしゃったような敗戦、教育環境の変容と、そして学生自身

にも激しい変化がありました。その間の変化について体験的に語れる者がだんだん少なくなってきたのが現実だと思えます。そういう意味で百二十五周年を契機に、残った者の一人として語り部的にとくに戦後の体験、教えた立場から学生との関係について話させていたいただきたいと思えます。

司会 小倉先生は、同志社中学のご出身でしたか。

小倉 そうです。私は同志社中学から大
学まで学んだ者ですが、同志社の百年史
を見てみましても、まさに戦中、敗戦、
断絶、混乱の時代を同志社のキャンパス
で過ごしました。中学生の頃が戦時中で
したからチャペルでの礼拝も三年の時に
無くなつてしまいました。その頃には配
属将校が同志社にも来ていて、新島精神
も、いつの間にか国士とかナシヨナリス
ト新島がしきりに強調されるようになって
いったのをよく覚えていますが。ハリス
理化学館の前に奉安殿がありますね。
司会 天皇の肖像写真（御真影）を祭っ
ておく建物ですね。

社へ集団で参詣、桃山の乃木神社まで行
ったりしましたね。予科には昭和十八年
に入りました。しばらくは講義が行われ
ましたが、すぐに徴用され、大阪へ勤労
動員で行かされましたね。

司会 聖書なんかはぜんぜん教えないん
ですか。

小倉 私は中学では宗教部に入ってい
て、聖書研究会をやっていました。先生
の指導で行うものは比較的自由でした
ね。

坂本 女子大学（当時は女専）に関して
も、昭和十六年に報国団が結成され、全
員で靖国神社遙拝式をしたり、下鴨神社
参拝と清掃に出かけるようになりまし
た。作業のほうも最初は岩倉農園などの
勤労奉仕ですんでいましたが、昭和十九
年になると授業は中止して軍需工場に学
徒動員されました。しかし、動員先での
賛美礼拝などは大目に見られていたよう
ですし、また女学校が昭和二十年三月ま
で毎朝礼拝を守っていたのは女子部なら
ばこそその思いがいたします。同志社大学
（男子部）がいろいろな面で矢面に立って
いてくださったということだと思います

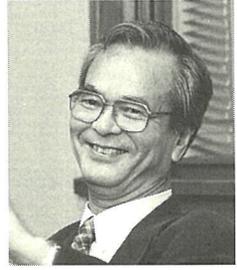
けれど。

司会 本宮先生も同志社中学ご出身です
か。

本宮 私は府立一中から同志社の予科に
進みました。一中という学校は、公立中
学の中では自由な校風で知られていたの
で、違和感はほとんど感じませんでした
ね。ただ、昭和十八年、十九年になりま
すと、軍国主義一色になりましたから、
同志社の先生方も表面は厳しくしないと
いけなかった。無理して渋面をつくって
いるそのあたりの気持ちは、だいたい察
していましたけれど。

井ヶ田 田畑忍先生がよく言っておられ
たのですが、奉安殿ができ、先生方も夜
は交代でその番をしないといけないこと
になったらしいんですが、先生方はなか
なか賛成しなかったらしい。それを薄々
感じた配属将校の「大学の先生は研究が
仕事なので、宿直はしなくてよろしい」
のひと言で宿直が無くなったそうです。
配属将校の中にも合理的な考え方のでき
る軍人もいたんですね。

小倉 戦時中のこの辺の事情はすでに人
文学研究所の共同研究で同志社やキリ



樋口秀雄氏

ひぐち ひでお／1932年長野県生まれ。同志社大学、同大学院修了。立命館大学、同志社大学で教鞭をとる。専攻はアメリカ文学で、主として1930年代の政治と文学、文学とスポーツを中心に研究。著書には『資料世界プロレタリア文学資料集』（三一書房）、「スポーツとエロス」（柏書房）などがある。

スト教と戦争責任などあり、その成果は『戦時下抵抗の研究』として出版もされています。

司会 戦後を迎えて、学生生活はいかかでしたか。

小倉 とにかく飢えていましたね。食糧難ということもありましたし、とくに知的な飢えを含めて、混乱への不安と猛烈な飢えを感じていました。

本宮 私は終戦後、同志社に帰ってきたんですがね、その当時経済学部黒田謙一先生という教授がいらっしやいました、先生の英書のゼミを受講していたんですが、先生が「私は体が悪くて、教壇に立つことができない。悪いけど君たち家に来て講義を受けてくれなにか」とおっしゃっていますね。ご自宅の炬燵に入っ

て授業を受けたんですが、そこでびつくりしたのは、奥さんが私ら数名の学生のためにカレーライスをつくってくださったんですね。あんな食糧難の時代に本宮に感激しましたよ。うわあーこれが同志社というものかと。それは感激しましたよ。間もなく体を悪くされお亡くなりになりましたけどね、その後、ご遺族に何か恩返しをしたいと思いますんですが、結局具体的に何もできないまま終わりましたが、そのときの同志社の先生から受けた印象というのが、後々まで心に残りましたね。

小倉 当時私は、同志社学生新聞にかかわっていました。いまでこそ大学では立派な広報活動が行われていますが、戦後の当時は学生新聞が唯一自分たちの主張

が発信できる場でしたし、それをまた学生が争うようにして読んでいました。先生方も巻き込んでいくというかたちにもなっていましたね。その頃は、講義にも緊張感がありましたね。そうした中で、学内で学生の政治活動禁止のことも絡んで湯浅八郎総長の辞任事件も起こったわけです。あれは一九四九年くらいだったでしょうか。

本宮 昭和二十四年は総長が学内政治活動禁止令を出され、学内に反対運動が起こった時の事です。当時私は学友会の副委員長をやらされていて、大変困りました。湯浅総長がやめられた事件はその翌年ですね。

井ヶ田 何がきっかけで湯浅先生がやめられたんですか。



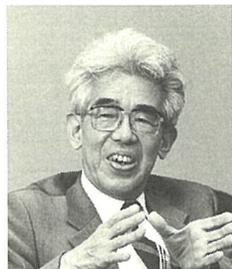
星野 紅氏

ほしの こう／1929年東京生まれ。奈良女子高等師範学校理科二部卒業。1951年4月～53年3月女子中学・高等学校理科嘱託講師、1953年4月専任教諭になり、1995年3月の定年退職まで、中学理科・高校物理などの授業を持つ。1995年4月から1年間嘱託講師、1996年3月退職。

本宮 湯浅総長はICU設立のため、アメリカで募金活動に奔走されていました。たまたまその時、事務局員の公金流用事件が発覚、報道されたのをきっかけに、当時の同志社の拡大政策を批判し「新島精神を忘れた経営主義だ」、学園に新島精神を取り戻せ」とする全同志社学生キリスト者連盟の呼び掛けに応じた学友会、教職員組合、宗教団、さらに神学部、法学部や多くの学部教授会が決議文や声明を出して学内が騒然となり、蕭学運動を展開した。当時私は同志社タイムスの編集者で、この状況をつぶさに記事にしました。湯浅先生がアメリカでこの記事を見て直ちに辞意を固められたと聞いています。

司会 それで大塚節治総長の時代に移る
 んですね。
 坂本 先ほど新聞のお話が出ましたが、女子大学でも一九五〇年に同志社女専・女大学生新聞が出て、後に同志社女子大・学学生新聞になりました。一流の講師とのインタビュー記事や講演要旨、学生の主張がしっかりと書き込まれており、読ませる紙面になっていました。学生が発信者であり編集者の意気込みが感じられましたね。残念ながら一九七〇年で廃刊になりました。
 小倉 樋口先生が同志社に来られたのは何年になるんでしょう。
 樋口 昭和二十五年ですね。湯浅先生の演説を聞いて非常に感激した記憶があります。
 小倉 小柄だったけど、ジェスチャーも

迫力があって、とても歯切れがよかったです。
 樋口 それが印象的だったものですか
 ら、毎週水曜日には栄光館のアッセンブリールームに出席しました。当時は何もない時代だったということもあるんですが、錚々たる人たちが講演に来ていましたね。得難い経験ができました。
 司会 当時はそういう話は、大学に来ないと聴けないわけですね。
 樋口 党派に関係なく、今の自民党の方から共産党まで、本当に錚々たる人たちが集まっていました。
 激動の時代を生きた社友たち
 小倉 当時は先生方も個性的な方が多かったですね。名物教授といわれる方も多く、田畑先生とか住谷悦治、竹中勝男先



井ヶ田良治氏

いげた りょうじ/1926年仙台生まれ。京都大学卒業。専攻は中世から近代への日本法制史で、土地所持や家族、村や町、裁判の制度などを庶民の目線から見ることに努めてきた。最近は英国と日本の法文化の比較史に取り組んでいる。著書に『日本近代法史』（法律文化社 1982年）、『近世村落の身分構造』（国書刊行会 1984年）、『法を見るクリオの目』（法律文化社 1987年）など。

生らが健在でした。住谷先生なんか多芸多才で、文人教授というのでしょうか、詩もつくられるし、スケッチ画、エッセーも凄かった。経済学史についてはもちろんですが、バラエティーに富んだ学識があつて、人間的にも幅の広さを感じさせる方でした。いろいろな局面で社会に働きかける発言をしてこられたし、学生とのきずなも太かったですね。当時は、政治の激動・学生運動のカオスを背景にして先生方の大学間交流も活発でしたしね。学生間の交流もあつたけれど、先生方も思想性を持った連帯がありました。たとえば京都大学や立命館大学、龍谷大学、同志社の間で、憲法擁護教授懇談会というのができましたね。私も井ヶ田先生といっしょに事務局をやらされました

ね、京都独特の風土もあつたのでしょ

う。井ヶ田 私は一九五一年の四月に同志社に来ました。当時でいいますと京大や立命との交流が活発でしたね。先生方も授業が終わったら、出町柳でいっぱい飲むということもしょっちゅう行われていました。今考えると不思議なんですが、戦後初めてドイツに留学された民法の先生、立命の方なんです、その帰朝講演も同志社で聞いた。流動性があつたんですね。そういうつながりがあるもんだから、一九五二年、破壊活動防止法ができるときも、一番最初に声を上げたのが同志社や立命、京大の教授会でした。同志社でいいますと岡本清一先生、立命ですと前芝確三先生、京大でいうと宮内裕

先生、そういう方で、日頃つながりがありませんから揃って反対声明を出したんですね。結局法律は通つてしまいましたけれど、憲法論議の枠ができて活動がはじまった。そのときは学生もいっしょです。から、デモで大きなものになりますと千人くらいになりました。デモに出るときは、私ら若い者が点々と学生の間をちらばり学生と警官隊が接触したときぶつからないようにして、まるでサンドイツのように挟まりながら行進しました。終わったあと、その頃にはもう明德館ができていたんですが、あの階段教室で、確かこれからどうするかと話し合いを持ったんですね。そのとき田畑先生が、懇談会を残すのだったら頭に「憲法擁護」を付けないといけないと俄然主張



望田幸男氏

もちだ ゆきお／1931年甲府市生まれ。京都大学大学院博士課程修了。専攻はドイツ近現代史で、最近は教育・学校の社会史の研究。著書に『近代ドイツの政治構造』（ミネルヴァ書房 1972年）、「軍服を着る市民たち」（有斐閣 1983年）、「ふたつの近代」（朝日新聞社 1988年）、「ナチス追求」（講談社 1990年）、「ドイツ・エリート養成の社会史」（ミネルヴァ書房 1998年）など。

され、大阪や神戸と違い、京都だけは憲法擁護の教授懇談会ができ、六〇年代まで続きました。その事務局を結局同志社では小倉さんと私とが引き受けたんですね。

本宮 今お名前の上があった恒藤恭、滝川幸辰、末川博先生など、当時京大や立命の有名な長老教授方の授業は全部同志社で私ならいましたよ。

望田 私がこちらに来たのは一九六五年ですから、先ほどお話にあった頃はまだ京大の学生でしたから、外から見ていたわけです。その中で記憶に残っているのは一九五一年に同志社の学生がストライキをやったんです。そのとき京大の学生をまえにして「同志社がストやります」とえらく力説していたのを覚えていま

す。まだお若かった岡本先生が講演にいられて、「同志社は絶対学生を処分なんかしませんから」と演説されてね。「同志社っていい学校だなあ」と思いました、まさか十数年後自分が同志社に勤めることになるとは思っていませんでした。

小倉 一九四七年に教職員組合ができますよね。これも大きかったですね。学長騒動とかね。

樋口 授業料値上げの反対運動は、一九五二年ですかね。

小倉 いや一九四八年にやっていたのでは。

樋口 私が三年のとき文学部のストライキ宣言をしました。たしか破防法のことだと思いますが一九五二年のことです。

哲学の川島秀一さんと僕が声明文を読み

上げましたね。

望田 私らの感覚では、同志社はおぼっちゃん学校と思っていましたからね。京大や立命はしょっちゅうやっていますねが、同志社がストライキをやるというので非常に印象に残っていましたね。大下角一学長が反対声明を出したのは一九五三年でしたかね。

小倉 大下学長が声明を出したのは、警職法の時でしたから五八年くらいでしょう。

望田 確か五二年じゃなかったでしょうか。

井ヶ田 僕が来たとき授業料問題が起っていたから、それじゃあないでしょうか。

小倉 トラック事件があった一九四九年



本宮 啓氏

もとみや けい / 1924年京都生まれ。同志社大学法経学部法律学科、文学部英文学科卒。同志社総長事務所職員。同志社中学校社会科教諭。学校法人理事、評議員を数期歴任。学生時代から同志社交響楽団の発展と宗教活動に尽力し、同志社ジュニアシンフォニー、女子中高校管弦楽部の育成とその人材養成を50年以上続け、これを通じて同志社の一貫教育の必要性、重要性をいつも訴えている。

じゃなかったかな。

井ヶ田 確か一九五二年に田畑先生が学長になれば、全学連の大会がありましてね。容疑者が学内にいるというので、警察は大学に入っちゃいけないということになって、田畑先生は全学連の大会も同志社では開かせないということにしたんですが、警察が強引に入って来たものだから田畑先生も学内に立てこもって、全学連の学生に One Purpose を歌わせたりにしていましたね。どうにもこうにもしかなかったのが岡本先生が、警察と交渉にあたりまして、大会が終わるまで逮捕状は執行させないという約束を取り付けまして、全学連を前に、京都府の会館に会場を借りたのでそちらに移動してくれと、三十分くらいかけて説得をされまし

たね。岡本先生の演説というのがまた見事でした。全学連も納得して移動してくれました。岡本先生や私たちもそれについていきまして、おまわりさんが来ないように見張りをしていたのを覚えていますね。そうしたこともあって、同志社の場合は学生と教授会の間で理解し合うものがあって、信頼し合える関係が生まれていました。

司会 破防法が一九五二年で、五八年に警職法があり、六〇年安保につながっていくわけですね。

坂本 今お話のあった五〇年代の運動では、女子大学で表立った行動はなかったと言えますが、六〇年安保の時には、三百名近い学生が円山公園の集会デモに参加しました。また六九〜七〇年にかけて

の大法法反対運動では、女子大生も学生大会で一日ストを決議、学校側は授業を続ける方針だったようですが、学生が決めているのだったら一日だけ休講にするということでも取めたようです。

司会 トラック事件というのはどうだったのですか。

樋口 一九五二年の頃ですね。トラックがキャンパス内に入ってきましたね。住谷先生がトラックの上から「皆さん立ち上げれ！」ってやるわけですね。

司会 先生がやるんですか。そういえば戦前、治安維持法で住谷先生は下鴨警察署からひどい扱いをうけておられますね。

樋口 今思うと学校側からなんて変なことですが、当時は感激しましたね。そう



小倉襄二氏

おぐら じょうじ/1926年京都市生まれ。同志社中学、予科、大学文学部社会学科卒業。文学部教授、文学部長、研究科長(元)、新島学園女子短大(前)、枚方市福祉オンズパーソン(現)。専攻は社会保障論、福祉政策、社会事業思想史。著書に『市民福祉の設計』(小学館)、『社会状況とその福祉』(法律文化社)、『福祉の深層』(法律文化社)、『老後保障システム論』(世界思想社)など。

「いう先生は偉いなあとという気持ちがあるが今もありませんね。」
小倉 今の大学には、当時の反骨の自由や熱っぽいものがなくなりましたね。だからといって、昔の話を掘り出して僕らはこういうものを同志社から得てきたが、これを受け継いで欲しいという風なことになっていいのかなあと。それがちょっと心配だ(笑)。ただ当時は、教師と学生の間で皮膚感覚でつながった感じがありましたね。しっかりと言論のやりとりもありましたしね。ところが今は、イデオロギーの終焉といわれて久しいし、情報化時代ということもあるので、教える者、教えられる者の関係がまったく変質してしまっただけですね。

樋口 教師と学生の間で皮膚感覚でつながっていたのは、社会で活躍されている方との接触というのでもあったんですね。たとえば同志社には徳田球一とか徳富蘇峰などの講演がありましてね、その演説を聞くたびに感激ですわ。あるとき一九五一年か二年ですが、日本の実存主義小説家といわれている椎名麟三を呼ぼうと思いいちまましてね、大下尚一さんと相談し、「それじゃ、呼ぼうか」ということになりましたね。ただお金がない。それで学生たちに募金を募り、京大にも賛同してくれるグループがあつて実現したんですが、泊まっていたところがない。それで私たちがちょっとくさいかもしれないけど自分の部屋を使ってくださいと申し出ましたね。当時はアーモスト館寮生でしたから。

「当時はそういうことが平気で行われていたんですね。今だったら、五十万円とか百万円持つてこいとかいわれるのでしょうけど。大学院一年の時でしたか、大学が動かないなら自分たちで動かそうかというので、私は長野県出身なんですが、同郷のみんなに「家から金を集めてこい」として声をかけましてね、それで哲学の濱田与助、文学の安永武人、政治学の岡田良夫の各先生を呼びましたね。松本で講演会を開きました。全部自分たちでやりましたね。」

小倉 旧制から新制になり、この六学部体制になってからというもの、今出川キャンパス、田辺キャンパスと学園のイメージもシステムも変わりましたが、新しい学部・学科の構想が実現しなかったり、



坂本清音氏

さかもと きよね/1935年生まれ。岡山出身。同志社女子大学大学院文学研究科修了後、女子大学非常勤講師を経て専任。2000年4月より特任教授。主な興味はイギリススピリタニ作家ジョン・パニヤンの研究、エンブレム文学、アメリカンボード宣教師文書研究など。いまだに「罪のにおいがする」などと言って周囲の壁紙を買っている。著書に「イギリス革命におけるミルトンとパニヤン」(御茶の水書房 1991年)、『来日アメリカ宣教師—アメリカンボード宣教師書簡の研究1869-1890—』(現代史料出版 1999年)がある(いずれも共著)。

ここからどこへゆくのか、同志社はなにもって世に問うのか、私たちは心配です。

新制中等教育、一貫教育

司会 新制高等学校はと言いますと、一九四七年には文部省の実施の手引きの中に、希望する者は誰でも入れるように運営すべしとありまして、旧制高校とは違って、だれもが地域の総合型高校に進む体制がつけられました。そして進学率があがり、今では九八%が高校へ進学する。しかし高校にこれだけ来るとマス教育化が進むのは必然で、教育学者トロウが定義した universal secondary education が浸透していきます。反面、受験のために、中等教育としては不完全なものにな

っていきます。戦前の中等教育も不完全でしたが、戦後の中等教育も、問題を残したまま進んでいるように思います。過当競争が中等教育のあるべき姿をゆがめてきたのです。その点、同志社の場合を見てみますと、中高一貫の教育が行われていて、中等教育が本来の中等教育として機能する可能性を十分に示しています。ただ学内高校にも希望進路をめぐる競争も起こったりしているようですが、星野先生はいつごろから女子中高と関係をもたれたのですか。

星野 一九五一年に奈良女高師を卒業いたしましたして二年間嘱託講師として同志社女子中学校で理科を教えていました。正式に入社しましたのが五三年です。

司会 当時の様子、思いなどお話しし

ただきたいのですが。

星野 最初の年は中学一年の理科の担当でした。生徒は私の話を実によく聞いてくれました。授業が終わると、十数人が教卓の周りに集まって来ました。何故理科の教師になったか、家に帰ったら何をするか、が聞きたいようでした。当時は週三日、西宮市の自宅から片道二時間をかけて通っておりました。

司会 星野先生は女子中高で教えてこられて生徒の質が変わってきたという印象を持たれたことはありますか。

星野 当時は、たとえば繊維関係がよくなると機屋^{はた}さんや染屋さんの娘さんが多くなり、悪くなると医者や銀行員のご家庭の娘さんが多くなりましてね。学年の雰囲気^{きずな}が少しずつ変わります。それぞれ



いいところがあつて、面白いなあと思
ました。今はそのようなことは無いと思
います。

司会 学費が高かつたということもあつ
たのでしょうか。

星野 それはあると思います。

司会 星野先生は、理科系の授業を持
たれ、いろいろ感じるころがあるのでは

ないでしょうか。

星野 確かに理科の中でも、物理とい
うと最初から拒否反応を示す生徒がいます
ね。しかし、女子中高生を見ていると、
かなりレベルが高いんじゃないでしょう
か。たまたま物理は苦手でも、文章を書
くと立派な文章を書く人は沢山います。
新書なども、読みこなして感動させられ
るような文を見せてくれたりします。そ
うした能力を十分生かしているかどうか
ですね。

井ヶ田 法学部で見えていますね、同志
社女子高から推薦で入ってくる学生が多
いんで聞いてみますと、川村あき先生と
親しくて、先生に言われて新書をたくさ
ん読んだ。それで社会科学に関心を持っ
て法学部を選んだというんですね。

小倉 社会福祉についても言えますね。
たとえば女子高からくる学生たちは問題
意識がはっきりしていて、部落問題、障
害児への関心、ボランティア活動なんか
を経験したりして、非常に教えやすいで
すね。

井ヶ田 司会者が言われた一貫教育のプ
ラスの面が出ていますね。受験、受

験で勉強が切られていない。

司会 三科目だけ勉強してきたのとは、
かなり違うわけですね。

小倉 松山総長が言い出されて、チー
ムを組んで一貫教育の委員会をやったこと
がありましたね。報告もまとめましたが
同志社の今後にとって大切なテーマで
す。同志社高校には東大、京大を受ける
学生もいますし、推薦をうけて同志社に
くる。この中高と大学のあいだ、その一
貫教育の意味が不明確です。推薦で入り
やすいということ、しかし大学とのコミ
ュニケーションの内実は不在のやりとり
になっていました。学内高校からの学生
への大学としての対応を積極化すべきで
す。

本宮 同志社中高の六年間、毎日礼拝す
る意味は大きいですよ。ここに同志社で
学んだという実感がある。やはり若い頃
のチャペルでの伝道というのは非常にい
いですね。新島精神、あるいはキリスト
教主義、言葉でどう表してもいいですが、
この学園に学ぶ者はぜひこのような情操
を心を持って卒業して欲しいですね。

司会 星野先生、卒業生が中高六年間学

んだことについて何か言ってくるようなことはありませんか。

星野 卒業生の同窓会に呼んでいただいて、いろいろ話を聞く機会が多いのですが、同志社で学んで良かったと、皆さんおっしゃいますね。それに卒業なさってからいろんな意味で大きくなられたなあと思うことが多いのです。さまざま分野で活躍されているようです。

司会 その中で生涯の友情が育まれているとか。

星野 それはそうだと思います。私自身、重なった自分の同窓会を欠席しても卒業生に呼んでいただいた同窓会に行きたいと思うことがあります。

坂本 私も同窓会に出席することがあるのですが、そこで感じることは大学の四年間で学びきれなかった同志社精神を、先輩たちと交わることによって学び、教えを継承していく場になっていると思います。それと女子大学では今も毎朝礼拝の時間がありますが、卒業生にとって毎日礼拝の行われていた栄光館は、何年たってもそこに座ると自分を取り戻すことのできる場所だと述懐される方が

よくあります。その意味は深いと思います。

樋口 おそらく本宮先生とは学んだ背景が違おうと思うのですが、聖書を読む機会がありました。知識としてですが、聖書をチャペルアワーで毎週読むと自然に頭に入ってくる。家で読めといわれてもあれは家では読めませんから。

本宮 そういう意味では中高の同窓会というのはみんな集まったら讃美歌を歌ったり、そりゃあいいもんですね。

戦後教育とリベラルアーツ

司会 戦後の新制大学は、旧制高校と予科を取り込んで始まりましたが、このときアメリカの大学制度、とくにリベラルアーツの考え方を採用したわけです。三年制を四年制に改め、教養ある専門人の育成をめざし、二年あるいは一年半の教養課程と、二年あるいは二年半の専門教育課程を整備し、旧制師範学校も総合大学の中に取り込んでいきました。

こうした改革に対し実業界はどういう反応をしていたかと言えば、日経連がしきりにこの問題を取り上げて批判をつづ

けました。新制大学になってから専門職業教育が軽視されている、戦前の教育制度の方がよかったと言います。一九五一年吉田茂が諮問した「政令改正諮問委員会」の答申を受け、日経連も一般教育は無駄であると断じ、この声に押されるかたちで、一九六二年の高等専門学校設立の流れになっていきます。ところが財界が姿勢を一変させるのは一九九四年の「新時代に挑戦する大学教育と企業の在り方」という報告書からです。その中で、偏差値教育はだめ、即戦力よりも広い視野と外国語能力、あるいは問題発見と解決能力を有する学生、文化に対する理解、リーダーシップと決断力のある学生、広い教養を持った学生が望ましいと、要するに教養を持った学生でないと困ると、今までとはまったく逆のことを言い出しています。また高校とその上にある大学の関係を見ても、トロウ流にいえば universal secondary education としての高校の上に mass higher education として大学がのっているということになるかと思えます。問題は大学のマス化が進み、この不満が噴出したのが

六〇年代の大学紛争でした。その後、生き残りをかけた時代、選別の時代を迎えるわけです。ある数字を見ると二〇〇九年には大学進学希望者と定員がほぼ同じになり、全員がどこかの大学に入れる時代を迎えるといえます。遡って二〇〇五年には大学の選別がはつきり出てきて、生き残る大学と潰れる大学がはつきりしてくると言われます。

樋口 僕が入学した頃は、リベラルアーツ華やかかりし頃でした。おそらくオース・ケリー先生が持ち込まれたのでしようが、湯浅八郎先生も同調して熱心でした。それが一年で終わってしまい、さあ自由に学部を選べとなった。ところが自由と言われても、さて何を選んでいいか分からない。当時リベラルアーツの何たるかはあまり分からないまま導入したのでしようが、今またリベラルアーツが見直されつつある。ただ、私が思うになぜアメリカでリベラルアーツが可能かという点、大学の規模が非常に小さく、せいぜい千五百人くらいだからでしょう。二万人抱えてリベラルアーツはできっこないし、本当にそれをやろうと思っ

たら規模を考えないと無理だと思えますね。その頃で言いますと飛び級というのがあった。外国語ですね。入学試験、前期にいい成績だと後期を取らなくてよかった。あれはとてもいい制度でしたね。

坂本 新島先生がアーモスト大学で学ばれ、アーモストはリベラルアーツですから、それを持ち込んだ同志社の底辺には必ずリベラルアーツがあるはずですよ。女子大学の話をすれば、戦後を迎え、新制大学になると、女子専門学校には三つの道がありました。一つは共学になり同志社大学の一学部として吸収併される、もう一つは女子短期大学になる、最後は特色のある四年制女子大学として残るといって選択でした。結局三番目の選択をするわけですが、それはこれまでの長い同志社女子教育の伝統と、それを精神的・物質的に援助してくれたアメリカの友人に対する責任が、おもんばか虜られたからでした。そして、その建学の精神としてリベラルアーツを掲げ、校名も *Doshisha Women's College of Liberal Arts* になりました。しかし実際にはリベラルアーツの大学とはどのような大学か女専の教

員には分かっていないわけです。そこで、アメリカでリベラルアーツ教育の経験のある R・H・グラント先生の講習を週一回計八回受けてスタートしました。カリキュラムとしては「人間関係」というユニークな科目を設置したり、主専攻・副専攻の制度も設けました。最初は少人数で教師・学生が一丸となって理想の大学作り邁進するのですが、樋口先生のお話にもあったように、歳月がたつて学生数も増えてくるとリベラルアーツ教育が実施でき難くなるわけです。しかし女子大学には一九九六年まで一般教育教授会という組織があつて、いわゆる教養か専門教育かという二文法で分けて考えられるものとしてでなく、女子大学の教育の底流に常にあるものとしてリベラルアーツを捉えていたと思います。大橋学長はこれからの女子大学は「リベラルアーツプラス」とか「職業教育を否定しないリベラルアーツ」でなければならぬと言っておられますが、いざれにしてもリベラルアーツという理念は女子大学の中に生き続けていくものではないでしょうか。

樋口 リベラルアーツの精神を復活させるとすれば、少人数のゼミで対話方式の授業を行うということであれば可能かもしれないですね。

望田 リベラルアーツの問題は、戦後ずっと、今日に至ってもはっきりされていないと思います。戦後、本格的な議論もされないままに、専門教育と一般教育という枠組みのなかで、リベラルアーツは一般教育との関係でとらえられ、時の経過とともに、専門教育優位の状況のなかで一般教育、ひいてはリベラルアーツは軽視され、ないし片隅に押しやられてきました。他方で大学におけるリベラルアーツとは何であるかを、一般論ではなく、具体的教科のなかで研究することも怠わられてきました。こうした経過のうえに、さらに今日では「学生は従来型の古典中心の教養を受けつけなくなってきた」という認識から、「現代における新しい教養」の必要が提唱され始めています。こうした状況のなかで、リベラルアーツの問題は、戦後未決のまま持ち越されてきた問題とともに、今日的状況からの問題という二重の課題を解決しなければなら

なくなってきたかと思えます。

しかも日本の教育を考えるうえで、もっと根本的な問題があるように思えます。それは日本の教育を世界的な比較の視点で見た場合の問題です。戦後の六・三・三・四制というのはシステムとしてはかなりアメリカナイズされたものだと思うんですが、ところがその頃の教員、あるいは学生も多分にヨーロッパ的な大学観を引きずっていた。では、まったくヨーロッパ的かと言えばそうでもない。たとえば同志社のような私立大学という成り立ちの大学は、ヨーロッパにはない。ドイツなんかはすべて国立だし、逆にイギリス、アメリカは私立が中心で、公立がこれを補完するかたちになっている。だからごく常識的にはシステムとしてはアメリカ的で、意識はヨーロッパ的だと分類できるのかもしれないが、それも単純化し過ぎていくわけで、日本の教育というものをどう考えるかこれは難しいですね。つまり先ほどお話に出たマーチン・トロウ流のアメリカ産の理論では割り切れないものがいっぱいあるわけなんです。たとえば大学全入時代も進学率

との関係よりも少子化のインパクトからです。そのあたりの整理をやっていかないといけないと私は考えています。

司会 恐らくリベラルアーツをきっちりやっていこうと思ったら、人手もお金ももっとかかってくる。そこまで覚悟していくとなると大変でしょうね。そうした中で比較的小クラスでやっているのが外国語教育じゃないかと思うのですが、そのあたりはどうでしょう。

樋口 先生方も非常に努力されているんですが、それでも一クラス三十人や四十人というのは多過ぎます。

司会 一クラス何人くらいが妥当だとお考えですか。

樋口 僕は十五人です。ただね、能力別編成にしないと、今は差があり過ぎますので。

司会 そうですね。入学時にブレースメントテストでも試みて、クラス分けをしないとか。

井ケ田 一九六〇年頃でしたかね、人文科学研究所で一般教育の研究会をつくりましてね、そのとき卒業生にアンケートを取りました。その結果なんですが、記

憶に残る感動した授業として住谷先生の社会科学なんかが圧倒的に多いんです。それは名物教授だからというわけではないですね。

望田 一般教養は、名物教授というか長老に持つてもらった方がうまくいくんですよ。ところが、現実には若手教員や新任の先生に持たせる傾向が強い。京大なんかでも一時桑原武夫先生が担当されたりしましたが、その方がうまくいくんですよ。だから、逆に言えば、専門の講義より一般教養の講義の方が難しいとも言える。それがまたリベラルアーツの問題ともからんでくるんですよ。確かに学部システムをどうするかも大事ですが、肝心なのは一般教育を含めて教育問題をどうするかということなんだと思いますね。

樋口 これは同志社だけの問題ではなく一般的に言えることなんです。一般教育教科の問題は、教科としての問題と身分の問題がいっしょになって語られる。一般教育の研究会や学会なんかもあるんですよ、しかし出てくるのは身分の問題なんです。

小倉 個別の大学だけでそれをやっているんじゃないかと思うんですね。大学コンソーシアム京都のしめすように大学間のネットワークを生かす形ですね。同志社のリベラルアーツ的なプログラムと、他大学のユニークなプログラムを上手に生かして交流していくシステムですね。自分たちの中に抱えこんでしまうのではなく、開かれた大学としてのシステム。うちの大学は、この方面のプログラムは自信を持って公開できるとか、大学も外に向けてメッセージを出していく必要があると思うのですが。

樋口 あるところでは、学級崩壊が大学まできているんですね。

望田 同志社女子大学では予備校の先生に頼んで、高校時代に世界史を学んでこなかった学生向けに予備授業をされている。ある意味で非常に先進的な試みをされている。たとえば新書を三日くらいかけてじっくり読ませ、何が書かれていたかレジュメをつくり、十分間スピーチさせる。ここらあたりを焦点をあてて大学教育も考えないといけない時期が来ていると思うの

ですが。

司会 岩波新書あたり？

望田 岩波は難し過ぎる(笑)。ほかにたくさん出てる新書本でいいんです。難しい本を読むというのではなく、読んだものをしっかりまとめ、自分のものにできる力量。ひと言でいえば論理的な思考ができる人間ということになるんじゃないか。こうした人間を育てるのが大学教育なんです。恐らく、こうした見方は企業の方にも相通じるところがあるんじゃないでしょうか。

小倉 総合科目というの、その点ではいい試みではないですか。

望田 ただね総合科目になりますと、チーフがまさに総合的にやっている人でないとだめで、そうでなければ学生にすれば専門の寄せ集めに過ぎなくなってしまう。

井ヶ田 基礎ゼミもそうですね。狙いはいいけど、専門科目の先生方には負担が大きいと不評で保たなかった。

望田 僕はまだやっていますが、基礎ゼミで討論させようとしても、基礎知識がないから討論ができない。だから僕は、

基礎ゼミは本を読む時間にしたらと言っているんです。教師もその間、本を読んでいたらいいい。四十分くらい経過してから何が書かれていたかを質問していくんです。つまり高校時代から、二時間も机に向かつて一冊の本を読むということをおそらくやってきていないと思うんですね。そういう意味でも、授業時間を本を読むトレーニングにあてる。基礎ゼミというのはそれでいいと思うんです。

井ヶ田 各地の小中学校ですでにやっている所もあります。実験的に。朝の何分かを、好きな本を読んで過ごす。後で何が書かれていたかを話し合う。そうして本を読むくせをつけるんですね。

小倉 いま、語彙が非常にとぼしいという話があるでしょう。で、使う言語を調べたことがあるんですか、それぞれ個人的な表現があるだろうと思うんです。衰弱しています。IT革命とか、携帯電話、パソコンなどその情報処理と一人ひとりの感性、表現力、人間的な想像力、これからの同志社ではこれらを育てることを希います。

坂本 先ほど申しました女子大学の「人

間関係」という授業でも、本を読んできてディスカッションするという時間を設けていたようですが、なかなかうまく行かなかつたと聞いています。

本宮 IT革命が進めば、家においても大学の単位が取れるようになるんですね。不登校の高校生でも単位を取って大学に入ってくるんでしょう。人間教育はなおざりになったまま、機械を介して得た知識だけで大学にくる。これはどうなんだろうね。むしろ人間教育のなされていく学生は放って置いて伸びていくのに。このあたりの議論をしてみたいですね。

望田 人間教育は高校時代にもう勝負がついていますよ。高校のクラス会に行くんですが、その頃とみんな変わっていない。皮肉っぽい奴は相変わらず皮肉っぽかりいつている。だから高校までの人間教育が大事だと思うんですが。

改革運動の遺産をどう蓄積するか

樋口 ところで、歴史の流れの中で、京田辺校地開校というのは非常に大きかったと思うのですがどうでしょうか。

望田 良かったか悪かったかは別に、六〇年末からマスプロ教育の時代に入るわけで、そのことへの自覚的対応なしにアメリカモデルを前提にやってきたわけですから、行き着くところは決まっていた。

小倉 いま思えば、全共闘時代は、緊張があったことは事実ですよ。三日おきに討論会に出て、夜おそくまで学生の質問に対する討論テーマを丹念に準備して討議していたわけですよ。現在の大学自体や学問の根底を問う、時代と状況への学生、大学からの発言の重さなどいちどこれからの同志社としてこの経過はきちつと集約すべきだと思います。

望田 しかし、日本の大学の運動は「大山鳴動して鼠一匹」という気がする。もちろん個々の人間は、運動の中に社会的意味や思想的意味を読み取ったとは思いますが。しかし、運動全体としては「大山鳴動して鼠一匹」ではなかったか。ドイツの六八年世代とはそこが違う。ドイツでは六八年が戦後史の画期になっているし、その世代が今のドイツを支えているわけですよ。しかし、日本の場合は挫

折感だけが残ってしまった。運動の在り様などいろいろありますよ。それもひっくり返って高度経済成長の流れに乗ってしまった。そのデメリットというものを知らないうちに受けているわけですよ。もちろん、デメリットをできるだけ小さくしようという議論はありましたよ。

樋口 あの当時、どんな議論があったかは知りませんが、京田辺移転の問題に關してはかなり長い間関係していたんで少し話しますと、内部の事情からの移転というのもあったでしょうが、外部からの圧力というのかな、あるいは大学以外からの逃れられない状況というのがあったと僕は思いますね。で、仕方なく結論を出さないといけないところまで来たと思いますね。

司会 ちよつと分かりにくいのですが、樋口 たとえば校地の問題にしても、大学としては焦っていた。府に申請を出すとき、今出さなければすべてが終わりになるというような状況がありましたね。その間は、必要なかどうかという議論じゃなかったように思いますね。

司会 ドイツの六八年の話がありました

が、そこでドイツの大学は大きく変わったのですか。

望田 変わった大学と、変わらない大学があった。ケルン大学なんかは少しも変わらない。一方ベルリン自由大学のように助手が学長になったようなドラスティックな変貌を遂げた大学もあります。

司会 しかし、日本の場合挫折感というのは……

望田 つまりね、日本は政治運動化してですね。世界同時革命なんて、行き着くところは挫折しかないじゃないですか。一方、ドイツは文化思想運動として展開した。だから、就職してからも運動を継続することもできたし、戦後保障の問題などで主導的な役割を果たすようになるんですね。日本はそうじゃない。もちろん個人的な例外はありますよ。しいて言えば、日本でも女性はその後も頑張っている。

司会 日本では女性は市民運動家になったが、男性は仕事人間になってしまった？

望田 そうじゃないんですよ。私が言いたいのは、当時の運動も男性優位社会の

なかにあった。だから女性は第二戦線にいたので運動のなかで権威の崩壊は見たけれど、挫折感は体験しなかった。だから、四十代、五十代になっても元気なんです。それが私の仮説なんです。研究者を見ても、女性は一騎当千の人が多いですね。もちろん、まだ絶対数は少ないですが。

井ケ田 大学改革後のことでは、ドイツの国家体制の話で言いますと、裁判官や検事の体制が、望田先生がおっしゃったように一九七〇年以降大きく民主的な体制に変わるんですね。現在では三割の裁判官が組合に組織されている。フランスでも同様です。日本はと言えば、まったく逆で裁判官に対する拘束、統制が強化されています。これは一つには学生運動の展開の問題があります。もうひとつはそれに対応する社会全体の受けとめ方に問題がある。アメリカで聞いてみますと、たとえばハーバードあたりで新しい法律史の研究をしているのはベトナム反戦運動組です。

望田 ドイツの問題で言えば、戦後改革を二回やっている。戦後一回やり七〇年

代に第二次改革をやっている。戦後史の画期がそこにある。教育問題でも、フェミニズムの問題でもそこから変わっている。ところが日本の場合には戦後の第一次改革のままきているんです。日本の場合は高度経済成長と私学の問題であればマスのプロ化の分水嶺はあるんだけど、中身の問題で言えば違ったものがあつたかどうか。どうも戦後の問題をひきずったままきているような気がしますね。

井ヶ田 小倉先生がさつき教師と学生の間で緊張があつたとおっしゃるように、そういう要素はあつたと思うんです。それだけに教師と学生のつながりが強くなりました。僕のゼミでは、それぞれ定期的に集まるのですが、五〇、六〇年代の学園紛争の頃のゼミ生たちは自分たちで呼びかけて集まるのですが、それ以降の卒業生はばらばらに集まってくる。

同志社教育の独自性、そして未来への展望

司会 今や生き残りをかけた「大学の危機」ということで同志社を含め各大学で、「果敢なる決断」による大学改革がおこなわれています。しかし問題は、教育学者

寺崎昌男氏の言葉を借りれば、改革には「外庄に庄された『果敢さ』はあるが、必ずしも『叡智』をともなつたものとは言えない」ということで、このあたりも検討していかなければなりません。改革の実態を見てみますと、一般教養が先細りする傾向にあり、昼夜開講、セメスター制度などが行われ、入試も多様化してまいります。大学院の強化は時代の要請でしょうが、学部教育も重要です。そして世間では一方ではリベラルアーツの再評価の声が高まり、その一方で大学において資格を取らせる傾向が強まってきた。大学におけるリベラルアーツと資格制度という二つの流れ、こんなことが傾向として見られるかと思えます。

坂本 女子大学でも今年度から「視覚取得支援講座」を開設して、ダブルスクールをしなくても学内で資格取得の準備ができるような制度を設けました。

小倉 一九九七年から新島学園女子短大学の学長で行ったことですが、日本の近代化、キリスト教の受容と展開、とくに群馬にいて同志社の新島襄の軌跡をばさんで新島学園と同志社の絆・存在感

を感じました。そこでいまに問う新島襄ということだけで考えようというところがありません。問題が平板化したり、マンネリ化する中で、今なぜ新島先生なのかを問い直してみる必要があると。戦時中に国士新島、ナシヨナリスト新島襄が強調された時期がありました。今伝記を読んでいますとたとえば自由民権に対して強い使命感もあつたし、体制に対する批判、権力に対して確執を醸し出す志があつたと思うんです。私は福祉をやっているんですが、福祉の原点に新島先生の化育がある。日本の近代化における源流を新島先生は持っている。二十一世紀を迎えるにあたって、いまに問うキリスト教の教育の意味、もう一度なぜ新島襄なのかを問い直すような作業が必要じゃないかと思うんです。同志社では同じような過去の解釈の繰り返しで、そのあたりに踏み込んでこなかったような気がするから。そういう作業を通じて時間ばかりですが、同志社の教育を再構築することができるんじゃないかと思うんです。もつと鮮烈な切り口をもとめるべきです。

坂本 お聞き及びと思いますが、現在創立百二十五周年記念事業の一つとして、『現代語訳で読む新島襄』の出版が企画されています。関係している先生方は、私を除いて全て新島研究に長年携わってこられた方々なのですが、私は今回初めて新島自身の書いたもの全般に目を通す機会が与えられ、実に多くの発見をすることができました。小倉先生もおっしゃいましたように、私も一人でも多くの同志社人が今こそ真剣に新島の読み直しをする時だと思えます。少し手前味噌になりませんが、『新島襄全集』全十巻発刊後初めて、多方面から新島に光を当てた今度の本が新島襄の再発見を促し、学園同志社の真の姿をイメージするのに役立つことを心から願います。

小倉 いぜんに語義のなかで大学のアクセントとして早稲田の政治・慶應の理財、同志社の社会問題へのかかわりといったことがあります。これからの大学危機、その在り様のなかで同志社の在ること、そのアクセントをせひくつきりと世に発信してほしいものです。教学と研究、その役割をふくめて。

司会 新島がアメリカで見てきたものは、明治時代の人には新し過ぎてうまく伝わらなかつた面がある。むしろ、市民社会が成熟し、ボランティアが定着しはじめた今日にして、生かすことのできる時代がきたという気がします。

小倉 女子大学は、新しい現代社会への学部をつくられましたがあれには二十世紀に向けた何かメッセージがあるんでしょうか。

坂本 女子大学が戦後リベラルアーツの大学として発足する際に、四専攻（英文学・音楽・社会学・食物学）を持ちたいと申請いたしました。しかし教授陣の不足から許可されなかつた社会学系の学部を、今回「現代社会学部社会学システム科」として立ち上げたわけです。これらの女性は更に一層社会と関わって生きていく責任があるとの考えに基づき、それを実現するための学問提供の場を女子大学の中に加えたわけです。近藤学部長は「自立した女性として現代社会に進出していけるような力のある女性、社会を変えていく原動力を兼ね備えた女性の育成」と言っておられます。

ただし、昨今の女子学生の女子大離れの傾向の中で、女子大学であり続ける難しさも十分に認識されております。しかし同じ学園の中に同志社大学という共学大学があり、単位互換・各種施設の共通利用・クラブ（サークル）の合流等であり交流は図れること、アメリカの友人に託された女子教育の責任のことなどを鑑みると、どの道をとることが女子大にとって最善であるのかは十分慎重に考察されるべきと私は考えます。

樋口 同志社が、男女共学になったのはいつ頃でしょう。

坂本 私学では同志社が最初で、海老名弾正総長のとき（一九二三年より実施）でした。しかし、あくまでも男子の大学に女子の入学を認めるというものであり、女子学生は極めて少数でした。今のような共学の有り様とは全く異なっておりました。

樋口 女子教育について言えば、今の設立の経緯のお話からも共学は難しい問題ですよね。日本の場合、教育上の問題よりも経営上の問題から共学に傾いていく。アーモスト大学でも共学になったの

は七十何年だったでしょうか。それまでは男子校だったので。先輩たちがおおもめにもめた。今は良かったといってるようですが。

本宮 今、香里はどうなっているんですか。

司会 国際コースができてまして、高校の一部が共学になっていきますね。

本宮 今具体的に、たとえば京大や立命に行つて単位を取つて来てでもいいということになつてはいるわけですか。あるいはそうした試みはあるわけですか。

望田 単位互換制度はやっています。しかし、実際にこの制度を活用している学生はごく一部で、全体の一割にも満たない。それよりも私はむしろ、東京の国公立でやっていることの方がインパクトがあると思いますね。私立大はお互いが競合関係にあるでしょう。たとえば同志社と立命が銀行の合併のようによいしよになれるかといえば、そうはならない。だけど国公立の方が進む可能性がある。一橋大と東京芸大がリンクすると非常にユニークなものができますよね。私学がこれにどう対応できるかですね。

本宮 しかし、同志社の卒業証書を得るためにはこの教育だけはしっかり受けてくださいということになるんでしょうね。

望田 先生のおっしゃることは分かるんですが、ユニバーサル段階になりますと、入学年齢も時期もずれるということが想定されているわけですよ。そういう中で、人間的な教育をどう貫徹するかということ。今なら四年間通して、人間教育を真ん中に据えることはできる、仮に学生が二万人いようがですね。

本宮 同志社の将来の選択に関して検討する委員会というのはあるんですか。

司会 二十一世紀に向けて若手・中堅教員による検討委員会ができており、定期的な会合しています。今日のお話に出てきたように、戦後の日本の教育は矛盾・可能性をはらんで歩んできました。その中であつて同志社も例外ではありませぬ。しかし同志社には歴史的に育んできた一貫教育など私学ならではの強みがあります。それを生かして新時代を築いていただきたいと願つて、座談会の締めくくりとさせていただきます。ありがとうございます。

ございました。

(二〇〇〇年六月二十七日収録)